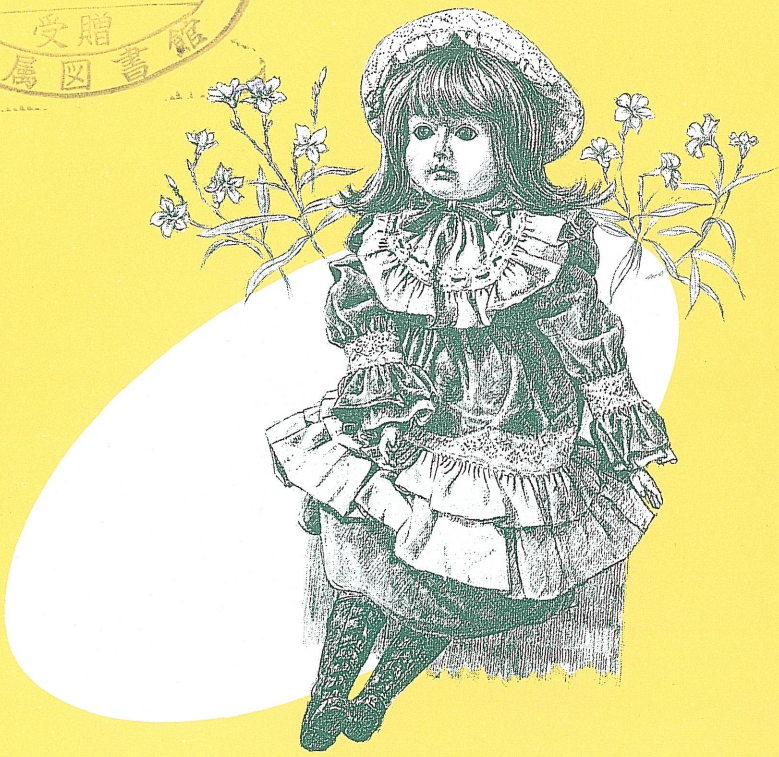
幼児の教育　第91巻　第３号　平成４年３月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN 0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1992 3

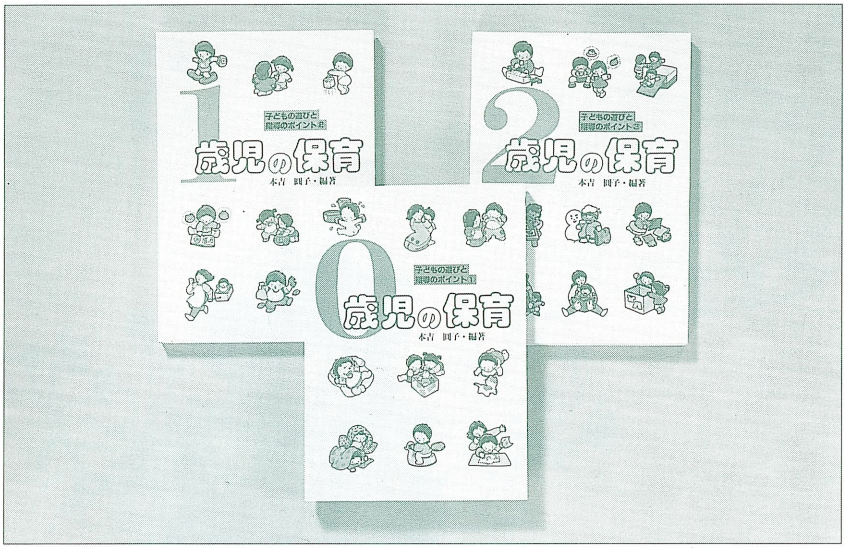
お茶の水女子大学
平成
-4.2.10
受贈
附属図書館



第91巻　第３号　日本幼稚園協会

遊びを育てる指導計画作成資料集

1. 月別子どもの姿の実例に指導のポイントが付記されていて0～2歳児の発達段階がわかり、保育のめやすがつけやすい。
2. 子どもの生活を中心にした年間指導計画案は、保育計画の見直しに役立つ。
3. 子どもが喜ぶ遊びの実例が豊富で活動を発展させるのに役立つ。



遊びの大切さを信条とした乳児保育の長年の研究をまとめたもの。子どもの発達の姿・指導のポイント、指導計画、遊びと生活の事例などが示されている。

1歳児の保育

本吉圓子・編著

B5判 228頁 定価2,200円(税込)

0歳児の保育

本吉圓子・編著

B5判 228頁 定価2,060円(税金)

2歳児の保育

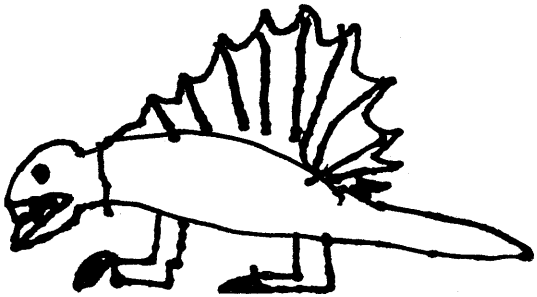
本吉圓子・編著

B5判 232頁 定価2,200円(税込)

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第91巻　第3号

幼児の教育

目次

——第九十一巻　第三号——

写真・子供讃歌……（4）

〈巻頭言〉人間の尊厳を学ぶ……津守　真…（6）

素朴さとパワーと……加用　文男…（8）

特集〈生まれる〉

ことばと生命（いのち）と人生と～生まれながらに～……原口　庄輔…（16）

生物が生まれる……石居　進…（20）

「生まれる」という言葉から思うこと……大橋利恵子…（24）

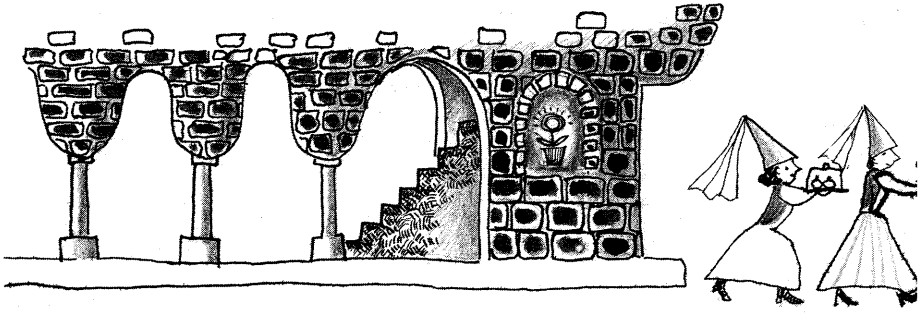
生まれる……菅野俊一郎…（28）

低気圧の誕生……松田　佳久…（30）

© 1992
日本幼稚園協会

アイデアを生み出す秘密の特訓……黒須　和清…（36）
「産」という営みの共有……中山まき子…（42）
附属幼稚園の教育⑿　最終回
卒業・進級の時期に当たって思うこと……村石　京…（46）
ある日の育児日記から⒂……佐藤　和代…（51）
幼児の笑いとその保育における意味⑵　二歳児の笑い……友定　啓子…（52）
若いお母さんたちへ　祐子四歳、肉親との初めての別れ……小薗江幸子…（60）

表紙・平野　清／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／吉岡　晶子・岩上　節子
編集部・大沢　啓子



撮影・平野　清

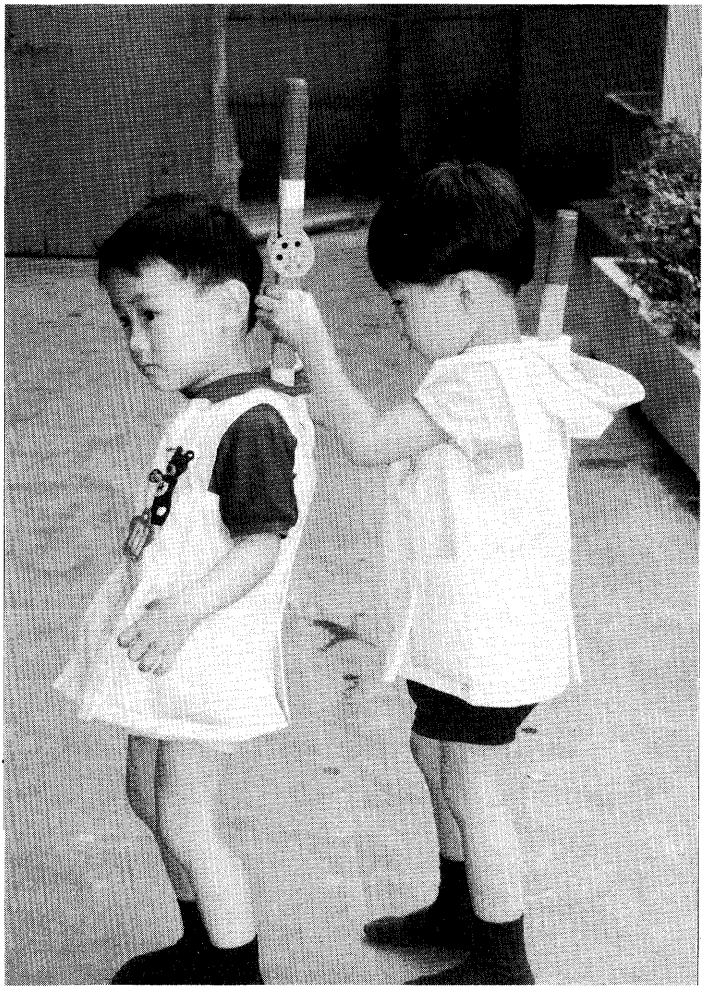
子供讃歌

二人で何の相談でしょう

これからたたかいに行くための剣の準備？

「背中くすぐったいよ　かっこよくやってね！」

「だまっててて!!　今、上手に入れてあげるから」



〈巻頭言〉

人間の尊厳を学ぶ

津守　真

昨年、十一月二十三、二十四日に、お茶の水女子大学講堂を会場としてなされた「子どもの権利条約」についてのOMEP東京フォーラムで、ポーランドのジャドウィガ・シコルスカは、「ヤヌシュ・コルチャックの生涯と仕事にみる子どもの権利の考え」と題して講演された。コルチャックはすでに一九二〇年代に子どもの権利条約の先駆をなす考えを持っていたことから始まって現代に至るその歴史的経緯について述べられた後、シコルスカはコルチャックの次の言葉を引用して講演の結びとされた。これは現代のわれわれに対する挑戦のように響く。

「子どもは人生の濁流の上をとぶ一羽の蝶である。われわれがその羽根に持久力を与えようとすれば、その飛翔力を損う。その羽根を鍛えようとすれば、その羽根は破れてしまう。」

これはコルチャックの主著『いかにして子どもを愛するか』の第一部「家族の中の子ども」の一節である。子どもを濁流の上をとぶ美しい蝶にたとえるコルチャックは理想主義的ヒューマニストのように見える。しかし、この文章のすぐ前には、次のように記されている。

「人は言う『この子はこんな人になってもらわないと困る、私はこんな子を望む』と。それにもかかわらず、人々は上等でなく平凡である。世の中はい

ずこも灰色である。人々は日常生活の中で忙しく歩き回り、小さなことに心配し、目先のことに追われ……期待はみたされず、悔やみに歯がみし、永遠に待ち望み……不正は横行している。乾いた無関心が氷の風のように身を切り、偽善が人々を窒息させる。鋭い歯を持つ者が襲いかかり、臆病な者は低く身をかがめる。人々は苦しめられるだけでなく、汚物の中をのたうちまわる。あなたの子どもはどんなものになるというのか。闘争者か、ただの労働者か、指揮官か、兵卒か、あるいはただの幸福な人か。幸福はどこにあるのか、幸せとは何なのか、それを知っている人はいるか。あなたは子どもを守ることができるのか。」そして、これにつづいて「子どもは人生の濁流の上をとぶ一羽の蝶である」とつづくのである。これをよむと、コルチャックは如何に現実を直視していたかが分かる。子どもの心を、破れ易い蝶の羽根にたとえる繊細な感覚の持ち主にとって、現実はいかに厳しく感じられたかが察せられる。

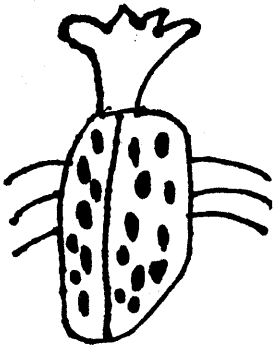
講演の前日、シコルスカ女史は、国立博物館と私の養護学校を見たいと言われた。銀杏の葉の降りかかる上野の森の静かな一隅で、目を閉じてもこの風景が瞼の裏にいつまでも残るようにしておきたいと、彼女は秋の夕暮れの香をかぐかのように何度も立ち止まった。翌朝、講演の直前に会ったとき、彼女は昨夜は遂に一睡もできなかったと言った。私の養護学校の子どもたちの顔がひとつひとつ思い出されたのだという。そして、あの子どもたちは人間の尊厳さ（ディグニティ）をもって生きていたと言われた。私はこれまで障害の原因は？　将来は？　との質問は多く受けたが、「尊厳さをもって」と言われたのは初めてである。私はこの人の、その繊細な感覚と見方に驚ろかされた。これは保育者の心である。

（愛育養護学校）

素朴さとパワーと

加用　文男

☆かぶと虫



数年前、ある夏の日、酒の席で聞いた話。

六歳の男の子をもつある親父。四〇歳くらい。

この前、息子が「お父さん、五〇〇円くれ」いうんだ。「なんに使うんだ？」ってきいたら、「かぶと虫買いたい。デパートで五〇〇円で売ってる」いうんだな。

「なるほど、そうか。お父さんも、おまえみたいな子どもん時があった。そやから、おまえがかぶと虫がほしい言う、その気持ちはよう分かる。昔はどこにでもおったけど、今はここら辺りにはおらんもんなあ。買いたいわなあ。しかしなあ、〇〇（子どもの名前）、かぶと虫は、ありゃあ、買うもんとちゃう。捕まえるもんや。な、分かった。ようし、土曜日まで待て、そしたらお父

さんが捕まえてきてやるから」と言った。（ここで、酒飲み友達の他の親父連中から、はっはっはの笑い声、「さすが！」だの「えらいぞ！」だのの掛け声もかかる）

かぶと虫は、夏の日の夜中から夜明けにかけて、林の中で捕まえるもんだ。そこで、俺は、土曜の夜中、車走らせて、山科の、あの辺りの山ん中に入って行ったわな。夜中に山道どんどん入って、もう藪の中や。真っ暗や。これもそれも可愛い息子のためや。な、分かるやろ？

上の方まで来たら道も狭うなって、車もここまで、いう所まで来た。

ようし、ここら辺りならと、車止めて、トランクから虫網と虫籠出して、そこでよう見ると、前の方にも車がとまっとる。はじめはアベックか？　この野郎、ええ事しとるなあ、かぶと虫捕まえに来た俺とはえらい違いや、思うてた。しかし、よくみると一台とちゃうんや、これが。何台もならんどる。五台も六台も。アベックが集団で来る訳ない。よう見たら、みんな俺たちと同じくらいの年格好の、むさっくるしい三〇、四〇の男ばっかりや。それがみんな、手に虫網と虫籠もって山登りしようとしとる。「こんばんは」、やがな。恥ずかしいで。（わっはっはの笑い声）

あの瞬間、頭ん中に「ああ、いま全国の日本中の親父族が、せっかくの休日の日を潰して、夜中に、手に虫籠持って、みんなして山ん中をかけ巡ってるんやなあ」。

そういうイメージ湧いてきてな、恥ずかしいいうより、なんともいえん気持ちやったな。俺は、俺たちは、いったい何しとるんだろう？　ってな。

まったくもって酒飲み共が大笑いした話でしたが、考えてみますと、結構奥の深い話のようにも思います。

子どものために、子どもたちの遊びのためにと、大人たちが頑張る。頑張らなくっちゃと、やればやるほど、それが、どういうわけか、滑稽というより、空転してしまって、何か間違ってるんじゃないか？　と感じてしまう、そういう実状になっているようです。現代は。

しかし、あの話が何故あれほど酒の席で受けたんだろう？

みんなして、大笑いも大笑いで、もういい年頃の親父たちが、口では「みんながやっとるんとちゃうわ、おまえみたいな奴だけや！」「あの山ん中によう行く気になったわ！」などと、皮肉ともあいづちともとれる感想述べながらも、なぜか共感してしまって、似たような経験談に花が咲いたものでした。

☆子どもはずるい！

あるクリスマスイブの夜。ある親父が子どもたちに言った。「毎年思うんだけどな、おまえたちずるいで。クリスマスプレゼント、子どもだけがもらっとるやんか？　お父さんやお母さんもほしいわ！」、子どもが言う「仕方ないやん、お父さん、大人やし」。親父「それでもずるいもんはずるい！　そこでや、今年はお父さんももらおうと思う」、子どもたち「？　？」

「今晩はこれを借りたい、あれを借りたい」と言い張って、子どもから絵本とか、おもちゃとかを借りだして、子どもたちがいったい何をやりだしたのか？　と見守るなか、「お父さんは、今日は寝るとき、ふとんを頭までかぶって寝る、そしたら顔が見えないし、枕元にこの絵本とおもちゃを置いとく。そしたら、サンタさんが来たとき、ああこいつも子どもやなあって思って、プレゼント置いてくれるやろ？　今年はこれでやってみる！」、子どもたち絶句。

さて、あくる日。目がさめてみると、子どもたちの「わーわー」の泣き声が聞こえる。驚いて起きてみると、サンタさんがプレゼント持ってきてくれなかったと、兄妹が泣いているのであった。

親父の全身に寒気が走る。しまった。お母さんも真っ青。

実は、前日、子どもの前でつまらない冗談いって、それで満足して、うっかり寝てしまった。夜中にはっと思いだして、買ってきた「プレゼント」に貼ってあった店

名の「ダイエー」だの「一九八〇円」だののシールはがしにとりかかり、なんだかんだしているうちに、肝心のこと、子どもたちの枕元に置く、を忘れていたのである。哀れ、プレゼントは押入の奥深く。

母親「おかしいわねえ？　サンタさん忘れちゃったのかしら？」、親父（内心、しまったと後悔しつつも）「うーん、おまえたちの日頃の行いが悪いから、今年はナシになったのかもしれんぞ！」などと。子どもたち、恐ろしい形相で見返す。親父、たじたじ。

母親「ああ、ひょっとして玄関とこじゃない？　あそこ見た？」、子どもたちが脱兎のごとく走り去るのを合図に、親父あわてて押入に走り、ついでベランダに走り……。

しょんぼりして返ってきた子どもたちに、お母さん「なかったの？　じゃあ、きっとベランダよ、サンタさんきっと急いでたのよ」に、子どもたち再び脱兎のごとくベランダへ。

やっとの思いで、朝の一騒動が終わったのでした。両親とも、ふうと息をついて。

親父、子ども部屋にいってみる。空の枕元をじっとみて、「ああ、ここに置かれているべきだったんだ」と感慨深く。すると、そこに紙切れがあり、見慣れた子どもの字で何か書いて置いてある。

「サンタさんへ。となりのへやにねているのは、あれはほんとはお父さんです。こどもではありません。まちがえないでください。　あきら」

☆マントにしっぽの大男

ある幼稚園での話。五歳児クラスのある女の子は、四月に入園以来、ずっと一人遊びで、他の子たちと遊ぼうとしない。

担任の先生がふと気づくと、いつも部屋の隅でぼーっ

としていたり、園庭の隅っこで、一人で、砂をいじっていたりしている。秋口になってもずうっとそのまま。

そもそも、誰とどんな遊びをしようが、それは本人の勝手というものです。一人で遊びたければ、それもそれはよし。遊びとはそもそもそういうものなのです。一人で砂いじりしたければ、すればいい。

集団で遊んでも楽しいし、二、三人でも楽しいことはある。一人で遊ぶのも、それはそれでいい。遊びだって、鬼ごっこのように激しいものもあれば、ままごとみたいに穏やかなものもある。それぞれが、それぞれなりに面白さ楽しさを持っている。多様性がある。そういう選択肢を持った上で、今はこれがいいと「選んだ」のであれば、これは自由の行使というものでしょう。

しかし、いつも一人でしか遊ばない、ということになれば、「それを子どもが選んだ」と見るよりは「そこに追いやられている」と見るのが、保育者として普通の感覚です。ニンジンが食べたくなって食べるのはイイ。しかし、いつもニンジンしか食べない、となると「お馬さんじゃあるまいし」と言われるのです。

冗談はさておき、担任の先生は頭を悩ましていました。○○ちゃんを何とかしなくっちゃと。

これまでにさんざんいろんな『援助』をしてきました。「今日は何して遊ぼうかなあ?」「ほら、ほら、見てごらん、○○ちゃんたち、ほら、あそこで、ブランコのってるよ。すごーい、ねえ、ねえ、いってみよ。先生と一緒に」……ダメ。

「A君たち、すごいねえ。この山(砂)、富士山みたいじゃない? ここから水ながすの? すごーい! わー、こっちの山は女の子山? こっちもすごいじゃない? でもちょっと負けてるわねえ。女の子みんな呼んでこようよ。ね、そしたら男の子山にも勝てるかもしれないわ。ね、ほら、あそこで○○ちゃん、お砂いじりしているし、来てよって、さそってきてみて!」。

なんてな具合で、保育者、あの手この手。

しかるに、いっこうに効果なし。そして一月、二月、かれこれ、半年……。

ある日、園の職員の一人が産休かなにかで休むことになり、近隣の園に応援を頼んだところ、ある若い男性の保育者が来てくれました。

その男、初めての園にきて、さて何したものかと考えたのか考えなかったのか、まあ、とにかく自分の特性を生かして、子どもたちを喜ばせてやろうと、風呂敷を首に巻いて背中になびかせ、これが「マント」。てぬぐいをお尻から垂らして「しっぽ」。この扮装で、突然園庭を両手を広げたまま「ぶーん、ぶーん」と叫びながら走り回り出した。「マントにしっぽの大男の出現だあ」という図。

子どもたちが喜ばないわけはない。わー、きゃーと騒ぎだして、次々と近寄ってくる。「おじさん、何しにきたの？」、男「おれはほれ、この通り」と走り去っていく。子どもたち、どんどんつられて走りだし、捕まえようと、鬼ごっこふうになる。大集団、わーわー。

その男、園庭のすみで一人イジイジしている女の子がふと目に入り、「ぶーん」と近寄って行く。女の子、ちらとみるが、それ以上の反応なし。男、構わず、目の前で「ぶーん」と一回転。しっぽがしなって、女の子の顔近くを飛び、女の子が払う。と、しっぽが手に弾かれて、ぼとっと落ちて、びっくりしたのは男の方。「やられたー」と叫んで、その場で大の字にのびてしまった。

女の子、担任の先生によると「あの子があんなに愉快そうに笑ったの初めて見た」というほど、大笑いして、大喜びして、大の字になった男を、他の子たちと一緒にわいわいがやがやのぞき込み、男が立ち上がるや、みんなして、再び、わーと追いかけて……。

以来、その男性保育者が加わると、他の子たちとも一緒に走ったり……。とにかく、人とも一緒に遊ぶ姿がみられるようになったとか……。

落ち込んだのは担任の先生。「私がいままでやってきたことは、あれは何だったんだろう？　苦労して、ああしたらどうか、こうしたらどうかと、一生懸命やってきたのに。それで、どうにもできなかったのに、あの人は、あの格好で走っただけであの子の心をつかんでし

まった。遊びの『指導』って、一体、何なのかしら？」

☆パワー

仙台にある「かたひら保育園」という保育園が『ゆらぎつつ子育て』なんていう本（ひとなる書房）を出しています。

この園は別に変わったことをしている園ではありません。ごくごく普通の保育園です。あれこれの紆余曲折の後、設立されて二十年。この間のいろんな歩みを、正直に書いたものなのです。

本としてなかなか面白い。「サクライごんごん」だの、「給食室の紙芝居」だの、見出しだけ見ると何のことかわからん、そういう工夫があって、なかなか読ませるのです。

一歳児が自分で給食室に「おかわり」に行く（想像して下さい。これ、一歳児にとってはほとんど冒険旅行に近いのです）話、朝の子どもたちと、お迎え前の夕方五時三〇分以降の子どもたちの様子の違いなど、描写が面白いし、いろんな話が載っていますが、雪合戦について書いているところがありました。

「（北国だから）雪が降る。すると、じっとしてはおれない。雪合戦となる。ほとんどの子が保母を狙う。圧倒的に多勢に無勢だ。だが、ここ一発の破壊力に関しては保母が数段優っている。だから、接近戦になると、その破壊力がしばしば子どもを泣かす。

保母からの直撃弾をくらって泣きだした子に、『ごめんね、平気？』と駆け寄るような保育を残念ながら、かたひら（保育園）はしていない。『なに泣いてんの、先生なんかみんなから当てられて、もっとひどかったんだからね！』

泣いている子にはもう一発直撃弾をお見舞いする。ただし、今度は当てる場所を冷静に考えて。たいていの子は、これでかえって立ち直り、またしても保母に雪玉を投げつけてくる。

『ひゃー、たすけて！』……」。

何でもないありふれた記録のようでいて、面白いと思いました。「泣いている子にもう一発」という、この奥の深いデリカシイが愉快なのです。

これを「デリカシイ」ととるか、それとも「何もそこまでやらなくても」ととるか、ここに巨大な分かれ目があります。ほとんど人生観の違いでしょう。

しかし、幼児、特に五歳児たちの心性には共通する何かがあるようで、素人じみたヘタな配慮がかえってアダになる、そういう部分があるように思います。

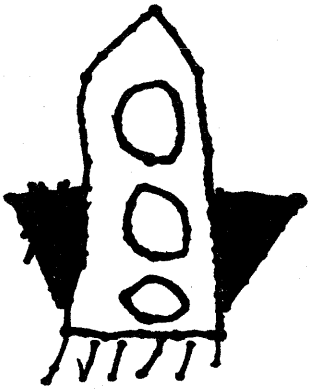
ある園で五歳児たちがくつかくしをしていたそうな。鬼が何人か代わるうち、ある子が鬼になった。クラスに二〇何人もおれば、いろんな子がいる。中にはドンクサイやつもいて、鬼になったはいいが、いつまでたっても見つけられない。本人はそれなりに一生懸命で、はやし立てられるうち、あっち捜し、こっち捜し、うろうろ。しばし、立ち尽くす。そのうち、みんな、なんかダレてくる。雰囲気を察して、このままじゃいかんと、担任が「〇〇君、ヒントあげようか、ヒント、あのな、あっち……」と言いかけると、鬼の子、「いやや、いやや！言うな！　言うな！」。

怒鳴り出して、泣き出したそうな。（こういうときの子どもの泣きは、奥が深いので、しつこくなることが多いものです）。いやはや、幼児といえども馬鹿にはできないものです。

〈プライドを自分で立ち直らせたがる年齢〉に入り始めたというか、むずかしいお年頃なのです。

保育者の柔軟かつ大胆な発想が求められるのです。弱気な大人の自信なげな「援助」ではパワーが足りない。

（京都教育大学）

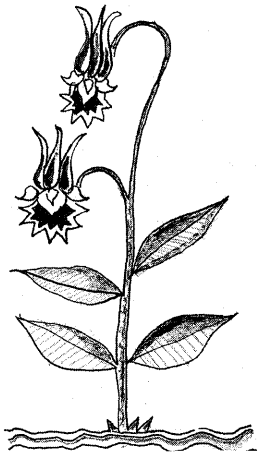


特集〈生まれる〉

ことばと生命（いのち）と人生と

～生まれながらに～

原口　庄輔



「生まれる」という表現は実に面白い性質をもっている。英語ではbear（生む）の受け身形を用いて、be bornというというようなことは、かって英語の授業で習った。「（子を）生む」ということは、女性の特権であり、主語には女性しかなれない。したがって、John bore twins.（ジョンは双子を生んだ）というのを耳にしたとすると、「そんな馬鹿な」とか、「Joan（女性の名）の聞き間違いではないか」などと思うはずである。

英語では、女性が子を生むときには、bearを用い、男性が子をもうけるときには、begetを用いて区別をする。事情は日本語でも似ており、「子を生む」のは女性であり、男性は「子を生む」ことはできないので、せいぜい「子をもうける」などと言うか別の表現を用いる。ところが、ある英和辞書のbegetの項を見ていたところ、Abraham begat Isaac.（アブラハム、イサクを生めり〈『聖』マタイ伝1：2〉）とあるのを見て驚い

た。他の聖書はどうかと思い、手元にある聖書を二冊ほどひもといて見たが、あいにく、文語の聖書はない。一冊は「アブラハムはイサクの父であった」となっており、もう一冊は、「アブラハムにイサクが生まれた」となっている。聖書によって、訳文に違いはあるが、「アブラハムがイサクを生んだ」式の訳は他にはあまりなさそうであり、例の英和辞書の訳文も改めた方が良さそうである。

日本語の「生まれる」は自発の意味の「あれる（are-ru）」が「生む（um-）」に付加されて導きだされたものである。人間の一生は、生・育・死からなっており、それらはほぼ次の(1)に示すような関係になっている。つまり、「生む」に対応する「生まれる」は自発であるのに対し、「死ぬ」に対応する「死なれる」は被害の受け身である。ところが、「育つ」に対応する「育たれる」とは通例は言わない。しかし、例えば文脈上の理由で、「（犬が大きく育たないように酒を飲ませたのに、大きく）育たれてしまい、弱った」のような言い方をすれば、それは被害の受け身の解釈になる。

(1)

生む――生まれる（自発）

…

育てられる（可能・受け身）――育てる――育つ――育たれる??

…

死ぬ――死なれる（被害の受け身）

一方、他動詞の「育てる」の場合、「られる」がついて「育てられる」となると、可能もしくは受け身の意味になる。このように、日本語の「(r) are-ru」は付加されるものにより、自発・可能・(被害の) 受け身のいずれかに限られてくる。人の一生の過程の三つの相において、「生む」「育てる」「死ぬ」のいずれに付くかによって、意味が異なるということ自体、興味深いものがある。

思うに「生まれる」というのは、誠に不思議なことであり、偉大なものや良きものは、全て感動や愛から生まれる。もちろん、感動や愛がなくても「生まれる」ものはあるが、それらは、概してありきたりで、つまらなく、取るに足らないものでしかない。何かに感動して、素晴らしい芸術作品が作り出される一方、シュバイツアーやマザー・テレサの偉業は、大きな愛に立脚している。

とすると、何か素晴らしいものを生み出すためには、豊かな感動する心を養っておくべきであり、広く大きな愛の心が大切であるということになる。ところが、現在の家庭教育や学校教育で、最も軽んじられているのは、感動するみずみずしい心を育むこと、広く豊かな愛の心を育てることのようである。その結果、子供は無感動・無気力になり、残忍になり、いじめを平気でするようになっている。最も大切なものを慈しみ育てることを怠って、素晴らしい世の中を築くことは望むべくもない。

人間には、(2)に示すように、貴重な宝が三つ生まれながらに備わっている。

(2)　a．生命力　　b．言語（習得）能力　　c．才能

「生命力」は、あらゆる生命体に備わっている、想像を絶する大きな潜在能力であり、その偉大さは、野沢重雄氏がハイポニカによって育てたトマトの巨木が示すとおりである。赤ん坊が言語を習得する能力も、人間に与えられた素晴らしい能力であり、人間にはまさに一を聞いて十を知る以上の言語能力が備わっている。また、人は必ず一つは優れた才能を持って生まれてきている。芸術・工芸・スポーツ・武道・学問・実業のいずれであれ、どれか一つは傑出しうる才能が潜在的に与えられている。惜しいことに、かなり多くの人が、自分の才能に気がつかないため、それをのばすことなく一生を終える。これは、人としてこの世に生まれたのに、残念極まりないことである。

(2)にあげた三つの宝も、そのままでは十分ではなく、それらを強化し、大きく開花させるためには、「磨く」ことが不可欠である。いかに素晴らしい才能をもっていても、日頃の努力と鍛練によってそれを磨かなければ、実を結ぶことなく、埋もれたままで終わってしまう。言葉の力も、磨かなければ、人を感動させ、幸せにする言葉の達人にはなれない。生命力も磨かなければ、それを強化し、いかなる困難にも負けない生命力に溢れた人物にはなりえない。

愛と感動する心を大切にし、生まれながらの素晴らしい三つの宝を、工夫と努力によって、磨きに磨いて、自ら光輝く宝となり、共に力を合わせて、我々の社会をこの世の理想郷に徐々に近づけてゆきたい、これが年来の夢である。

(筑波大学　現代語・現代文化学)

生物が生まれる

石居　進

いまワープロで「うまれる」と入力しました。すると「生まれる」と真っ先に変換されました。この字から分かるように生物は生きていると同時に生まれてくるものでもあるのです。言い換えると生きているということは生まれてきたということです。

そこで生物が生まれてくるということはどういうことかを考えてみました。先日、テレビを見ていましたら、ある偉いお坊さんが生命の貴さを次のように説いておいでした。まず一人の人が生まれてくるためには、一つの精子と一つの卵が合体しなければなりません。その一つの精子は何億とある精子のうちの選ばれたたった一つの精子なのです。これだけでも、生まれてきた一人の人は貴重なのだといえます。その上、どの人にも両親がいます。すなわち一人の人が生まれてくるのには二人の人が必要です。この両親のそれぞれに、やはり二人の親がいます。そこであなたが生まれるのには四人の人が必要なのです。このようにして、遡っていくと一人の人について一〇代前には一〇四万八五七六人が、一

〇〇代前には一兆九九五億一一六二万七七七六人という膨大な数の人がいたことになります。たった一人の人が生まれる背景には沢山の人たちがいたことを忘れてはいけません。

お坊さんはこのように説いておいでした。この議論のあとのほうの計算のもとの論理には、誤りがあります。何故ならこのような計算をすると地球上には昔ほど大勢の人がいたことになってしまうからです。しかし、この計算ほどでなくても、一人の人が生まれてきた背景には大勢の先祖の人たちがいたことは疑いありません。そして、人が生まれてくるということはこのように大変なことなのです。

さてこのお坊さんの話は生命の継続性という生物の持っている重要な特徴をもとにしています。この問題を歴史的にみてみましょう。一六六五年にロベルト・フックという人が当時初めてできた顕微鏡でコルクの薄片を観察して細胞を発見しました。しかし、彼はこの細胞というのは全ての生物の体を作っている構造の単位であるという重要な事実に気がついていませんでした。一八三一年にブラウンという人が細胞の中に核があることを見つけました。しかし、彼もまたその発見の重要な意味を知りませんでした。その後、この核の有無を頼りに調べて、全ての生物体は細胞からできていることを明らかにしたのが有名なシュヴァンらの細胞学説（一八三九年）です。このころに、卵も細胞であることを、細胞は細胞からしかできないことなどが分かってきて、すべて生物は細胞を通して代々つながってきているのだというフィルヒョウの細胞系統説（一八五五年）が成立します。このようにして生物学者たちは生物が生まれるというのは、親の細胞から次の世代の個体が生

じることだと知りました。さてこのころ、チャールス・ダーウィンが進化論を発表します（一八五九年）。そして生物は進化してきたのだと皆が考えるようになります。ところが進化と言うのは親に似ていたり親と変わってきたりする話ですから、遺伝と言うことがはっきりしないと、進化がうまく説明できないのです。そこで進化論に刺激されてメンデルが有名なエンドウマメを用いた遺伝の実験を行います。ダーウィン自身もパンジェネシス学説という遺伝についての仮説を考えます。このような研究がもとになって今世紀になると、遺伝学が発展し、遺伝は遺伝子によって決定され、この遺伝子は細胞の核の中にあるデオキシリボ核酸という物質であることが分かります。そして、生物が生まれるということは、親からの遺伝子を受け継いでくることだと分かるのです。

難しい話になって恐縮ですがもう少し我慢してください。生物はこのようにして親の細胞を通して、何百万個、何千万個の遺伝子を受け継いで行きます。しかも、遺伝子はご存知のように突然変異といって変化することがあります。そして、生きてゆくのに有害であったり、不利であったりするような性質の遺伝子は排除されます。そして生きてゆくのに必要であったり有利であったりするような遺伝子は残って受け継がれてゆきます。

このように生物は細胞が出来た時から延々と、細胞によって繋がり、そして生きて行くのに必要な遺伝子を（同時に不必要であっても無害な遺伝子も）、受け継いできているわけです。生まれると言うことは、このように長い長い生命の歴史を受け継ぐことなのです。あなたが生まれた時に、両親から渡された遺伝子の中には、地球上に生命が発生した

当時から、そのまま変わらずに続いてきたものも、あるいは両親の時代に新たに変化したものもあるかもしれません。しかも、生まれてきたこの体は、人類が長い歴史の間いくら調べてもまだ調べ尽くせないように複雑な体なのです。

生物が生まれるということの中にはこのような意味があります。皆さん、この価値ある貴重な命を受け継いだ次の世代を大切に、かつ逞しく育てあげてください。

（早稲田大学・生物学）

「生まれる」という言葉から思うこと

大橋利恵子

最近、息子とこんな会話をかわした。

「お母さんはどうして東京生まれなのに、岐阜に来たの？」

「それはお父さんと結婚したからだけど、もしあの時すれちがってしまい、会わずに終わっていたら、お父さんとお母さんは結婚していなかったと思うことはあるのよ。そうしたらあなたも生まれてこなかったわね。」

「そうなっていたら、どうしていた？」

「さあ、東京で幼稚園の先生していたかな。でも、お母さんだって、もし日本が戦争をしていなかったら、あなたのおじいちゃんの運命が変わっていて、生まれてこなかったかもしれなかったな。一人の人間が生まれてくるにはみんなドラマがあるわね。」

中学二年生の息子がこの話をどのように受けとめたかはわからないけれど、私は何か、一人の人間の誕生の裏にある、不思議な力、運命とでもいうか、人間の力ではどうすることもできない大きなものを感じていた。

と、同時に一人一人の子どもが、何といろいろなことを背景にもって生まれてきているかということをあらためて感じさせられた。

両親の育ち、考え方のみならず、祖父母の境遇、社会の流れ、文化等々、様々なことが折り重なって「その子」がそこに誕生しているわけである。

さらに、どんな地域で育ち、兄弟関係はどのようで、近所にどんな友だちがいて……とたった三～四年間の育ちしかしていない幼児でも、一人一人の個性が違うことはあたり前とうなずける思いである。ある意味では、集団の中でみんなと同じにすることを押しつけられていない幼児期の子どもたちの方が、一人一人の違いを発揮しているのかもしれない。

いずれにせよ、私たち保育者は、この生まれた時から違っている一人一人の子どもにそって保育をしていかなくてはならない。

話が少し「生まれる」からずれていくが、この「子どもにそって」というのがむずかしい。ただ単に子どものそばにいるだけなら、それ程ではないが、ここでのそっては「子どもの気持ちにそって」ということである。子どもの要求をくみとり、何気ない援助をしていけばよいのであるが、ふと気がつくと、運動会、バザーの作品作り、公開保育等、教師

の思いが強い時など、子どもの方が教師の要求をくみとり、教師にそって活動していてくれたりして、反省することしきりである。

子どもの気持ちにそってということを考える時、私は

「朝顔につるべとられてもらい水　千代女」

という句を思い浮かべる。つるべにまきついた朝顔を、無理にひき離すのではなく、自分がよそに水をもらいに行く。朝顔の気持ちにそってあげているのである。しかし、多くの人に（もしかしたら一人だけでも）めいわくをかけていることをそのまま見逃していてもいいのだろうか？　と思ってしまうのは、教えたいばかりの教師根性であろうか。

今、私が保育の中で心がけている事は、朝顔のつるを無理にひきちぎるのでも、そのままにしておくのでもなく、そのつるが自然に伸びていけるような新しい支柱をそばに立ててあげられないかということである。

しかし、これが本当にむずかしく、なかなかできない。例えば、生き物とのかかわりでも思うことがある。子どもたちは自然の生き物で遊ぶことが大好きである。私の今、勤めている岐阜の大洞幼稚園という所では、園庭で、バッタ、カエル、トンボと何でもつかまえられる。（そのかわり、ヘビ、ムカデなどあまりいてほしくない物もいるけれど）飼育小屋には、インコ、チャボ、ウサギ、畑にはイチゴ、じゃがいも、玉ねぎ、さつまいもと、たっぷりとある自然の中では子どもたちは生き生きと遊んでいる。しかし、ふと気がつくとヤゴを側溝のみずたまりからすくい出し、カエルをにぎりしめ、トンボをビニール

袋の中に押しこめているのである。小さな赤ちゃんウサギがかわいくて、とりあいっこをしたら赤ちゃんウサギは地面にたたきつけられてしまったこともあった。

「そんなことをしたらいたいし、苦しいの。かわいそうだから大事にしてあげて。」と言ってしまうのは簡単だと思う。命が大切なことを言葉で説明しても子どもには何にもならない。では、少しの犠牲はしかたがないと見守るのか……？

N子はウサギで遊ぶのが大好き、自分で小屋から出してきて抱いている。Y子もT子も一緒にえさをあげたり、なでたりしている。そこへ、男子たちが乱入。おれにもかせとばかりにウサギをひっぱる。遊びはじめの頃は前にも書いたようにウサギの取り合いをしていたが、しばらく遊んだ頃には、N子やY子がちゃんと手をひっこめる。「ひっぱったらかわいそうだもんね」と顔を見あわせながら、そして、しばらく待っていると、男子たちはどこかに行ってしまい、またウサギは自分たちの所にもどってくるのが解っているようである。

教師が適切な指導をした結果、新しい支柱をみつけられた実践例でなくて、申し訳ないが、N子やY子のこのあり方は、ウサギを抱き、そのあたたかさや、やわらかさを自分の手を通して実感したことから生まれてきたのだと思う。直接かかわって、そのかかわりの中からいい方法を見い出していく。それが新しいかかわりの中から生まれてきた支柱なのだと私は思う。

一人一人違って生まれてきた子どもたち、その一人一人の気持ちにそいながら、大人や

子ども同士、そして自然とのかかわりの中で、その子なりの考え方や自発性が生まれてきてくれたらいいなと願いつつ、今日もどろんこになって遊んでいる。そこに生まれてくるすてきな子どもとのかかわりを期待しながら……。

（岐阜市立大洞幼稚園）

生まれる

菅野俊一郎

先日、私の父が、このうちに泊っていった。誰かの結婚披露宴に出たとかで、夜も更けてからの来訪だった。ちょうど私も仕事をひと区切りしたところだったので、少し酒をつきあうことにした。

私の三人の息子たちの近況などを思いつくままに話し、父も、そうか、それはよかったなどと相槌をうっていたが、ちょっと改まった口調で、それは記録しておいた方がいい、と言う。自分は、いっさい、そういうことをしてこなかった、ということを、このごろ、

少しばかり悔んでいるのだ。いったい、お前たちが子供だった頃、何をして、何を感じて、暮らしていたのか。それを思い起こしたくても、そうする手がかりが、何もない。思い出すのは、自分のことばかり。それが少々、残念な気がする、というのだ。父にしては、感傷的なセリフである。過去をふり返り、足し算や引き算をして、自分の人生の価値を確かめてみる、そういう年になったらしい、と本人が言うのだから、その通りなのだろう。

また、こんなことも言っていた。さて、善とは何か、悪とは何か。お前はどう思うか。自分には、よく分からないのだが——。もちろん、私にだって分からないので、ふたりで、あれこれと頭の引き出しをあけて答を探してみるのだが、見つからなかった。キリスト教的倫理観から、湾岸戦争、交通マナーまで、話題はおよんだけれど、まるで歯がたたない。混沌としていて、つかみどころがない。創造は、混沌から生まれると言うけれど、混沌は混沌のままであった。しかし、父は、これで少し安心したと思う。考えても考えても、答がないのだから、これ以上はまさに感傷でしかない。

ところで私と言えば、このごろは、三人の息子たちの写真を撮り、仕事でつけている日記の片隅に、ひとことふたこと子供のことを書きとどめている。今朝などは、長男と次男が遊んでいるところを、録音テープに録ってみた。

さて、生まれたものは、何でしょう。

（コピーライター）

低気圧の誕生

松田　佳久

Ex nihilo nihil fit.（無からは何も生じない）ということは、すべての気象現象に対しても例外なく当てはまる。どのような気象現象も、それが誕生するのには何らかの「タネ」が必要であり、それが成長するのには何らかの原因が必要である。本稿では、複雑多岐に渡る気象現象の中から「低気圧」を選び、それの誕生や成長をなるべく簡単に説明したい。気象現象と言われるものは、小は数センチメートル程度の範囲の風のゆらぎから、大は地球全体に渡る一万キロメートル程度のスケールの空の運動まで実に様々である。その中から特に「低気圧」を選び出したのは、それが我々の日常生活にとってなじみが深いものであると共に、現在の気象学においても非常に重要な問題であるからである。

さて、「低気圧」と言っても、よく知られているように、温帯低気圧と熱帯低気圧（台

風）の二種類がある。前者は、日本では春と秋におおよそ数日おきにほぼ周期的に経験される。中緯度および高緯度特有の現象である。一方、後者は日本にも来るが、熱帯の海洋上で発生するものである。両者は共に「低気圧」と言われるが、その発生や成長の原因やその性質を全く異にするものである。両者に共通な特徴は、「低気圧」という名のとおり、周囲より気圧が低いということから来るものである。まず、この共通の特徴から説明したい。

気圧の高低ということは、無色透明の大気では少し分かりにくいが、空気の代わりに水を考えると分かりやすくなる。池や水槽の水の水面が平らではない場合、へこんでいる所が低気圧に、出っ張っている所が高気圧に相当する。地表面で考えると、周囲よりたくさんの空気が乗っていて、空気全体の重さが重い所が高気圧であり、軽い所が低気圧である。水の例で考えると、水面がへこんでいる部分には、次の瞬間、周囲より水が流れ込んで来そうである。つまり、大気の低気圧の部分には周囲から風が吹き込みそうである。実際、温帯低気圧でも台風でも幾分かは周囲から風が吹き込んでいる。しかし、低気圧付近においては、主に風は低気圧の中心を時計の針と反対向きに回って吹いている。高気圧のまわりでは、風は時計の針と同じ向きに吹いている。但し、これは北半球での話であって、南半球では高気圧と低気圧のまわりで吹く風の向きが北半球と逆になる。このような風が吹く原因は、少し難しくなるので詳しくは省略するが、地球が自転していることと関

係している。自転の影響で、風が吹くと風向に対して（北半球では）直角右側方向の奇妙な力が空気に対して働く。そのために、低気圧に向かって、四方から空気が吹き込むと、この奇妙な力の効果で、空気が反時計回りに回転し出す。地球の北半球も一日一回転、時計と反対方向に回転している。従って、低気圧のまわりの風の回転は、地球全体の自転の小さくなったものと考えてもかまわない。

次に、紙数の関係上、熱帯低気圧（台風）に話を限定して、その誕生や成長の原因を説明したい。物事の順序としては、誕生があって初めて成長があるわけであるから、まず台風の発生の発端から説明すべきであるが、実は、現在においても台風の発生の発端については、その成長のメカニズムほどはよく解明されていない。そこで、まず、台風の成長のメカニズムについて説明したい。

まず、熱帯の海洋上に弱いながらも低気圧があったと仮定しよう、その低気圧は以下に述べるような仕組みで成長していくことが可能である。既に述べたように、低気圧のまわりは主として時計と反対方向の向きに風が吹いていると同時に、まわりから集まって来た空気は、（海面にはもぐり込めないので）上昇流となって上層に上がって行く。具体的には、低気圧の中にいくつもの積乱雲が発生し、その積乱雲の中に強い上昇流が出来る。（台風の大きさは数百キロメートルの程度、個々の積乱雲の大きさは一〇キロメートルの程度である。）この上昇流が台風の成長にとっては重要なエネルギー供給源となるのであ

る。というのは、空気が上昇すると、上に行くほど気圧が低くなるために、ある空気のかたまりに注目すると、それは膨脹する。その際、その空気のかたまりは、まわりの空気を押しのけることにより外部に対して仕事をしたことになるので、その分だけならば、上昇流が存在する所は周囲より温度が低くなりそうである。しかし、熱帯の海洋上の空気は湿っていて、上昇流中では、水蒸気も冷却されて、やがて水となる。この水が雨となって、地表に降ってくるわけであるが、水蒸気が水に変化した際、凝結熱が発生する。（水に熱を加えて水蒸気にする過程の逆の過程である。）この発生した熱により、積乱雲の中、ひいては積乱雲が多数存在している低気圧の中の温度が、周囲より高くなって来る。温度の高い空気は、密度が小さく軽いので、上昇し、低気圧の所でますます上昇流が強くなって来る。上昇流が強くなると、周囲から水蒸気を含んだ空気がますます集まり、上昇する時、凝結熱を出して、低気圧の所でますます温度が高くなる。この低気圧ないし台風の背の高さは一〇キロメートル位である。つまり、上昇流はいつまでも上昇していくのではなく、上層に達すると今度は四方八方に広がって行く。この時、下層で空気が集まった以上に、空気が四方に流出してしまう。そのために、この低気圧は中心において、気圧はますます下がって行く。下層では空気が集まって来るので、だんだんと反時計回りの方向の風も強まってくる。このようにして、初めあった弱い低気圧が強まり、台風といえるものが誕生し、成長して行くわけである。

以上の説明からも分かるように、台風の誕生や成長や維持にとって本質的に重要なものは、水蒸気が水に成る時に放出される凝結熱である。これが台風の誕生や成長に必要なエネルギー源である。台風が十分成長した段階においても、この凝結熱によるエネルギー供給は台風にとっても必要なものである。というのは、台風の大変強い風も、摩擦の影響で、そのままでは段々エネルギーを失ってしまうからである。従って、摩擦の効果で失われる分のエネルギーを凝結熱の形で補給してやる必要があるわけである。

従って、台風が発生するためには、発生する場所の空気が湿っていて、十分水蒸気を含んでいる必要がある。空気は湿度が高いほど、多くの水蒸気を含み得る。また、海面温度が高いほど、海面から空中への水蒸気の蒸発が盛んである。そういった理由で、台風が発生する場所は熱帯の海洋上に限られている。実際、台風が発生するのは、海面水温が二六度から二七度位より高い海域にほとんど限られていることが知られている。

しかし、温度の高い海面の上に十分水蒸気を含んだ空気が有れば、ひとりでに台風が生まれてくるわけではない。台風が発生するためには、あらかじめタネとして弱いながらも低気圧が存在する必要があるのである。そのような台風のタネとして、「偏東風波動」というものが、気象学では注目されている。熱帯地方では年中東風が吹いているが、それを偏東風と言う。その偏東風の中に存在する波が「偏東風波動」である。この波の低圧の部分が、右に述べたような台風の発生に好都合な海域に来た時、台風が発生する場合があり、その過程が詳しく調べられている。しかし、すべての「偏東風波動」が台風に発達す

るわけではない。ある場合には、波動のまま消滅してしまう。どのような条件がそろった時に台風に発達するのか、現在のところよく分かっていない。

結局、これらの不明な点が解明されることにより、台風の発生の予報もより確実なものとなるのであるが、元来、「生まれる（誕生）」ということは、人の計り知れない神秘の世界であり、気象現象である台風もその例外ではない現在である。この課題は、今後、気象学研究者の間で色々と研究されていくことと思う。

（気象大学校）

アイデアを生み出す秘密の特訓

黒須　和清

「お仕事は何ですか？」と聞かれ、一言で答えられない稼業の私である。

「ある時ゃ工作の先生、ある時ゃさし絵画家、またある時ゃ劇団の団長、普段はしがない紙粘土人形作家、でもペーパークラフトもやってるよーん！」まるで多羅尾伴内である。ただこの中のどれにも共通している事、それは「アイデアを生み出している」事だ。最近私は自分を『クリエイター（創る人）』と呼ぶ事を気に入っている。

さて、私が今この仕事でどうにか飯が食えているのは、実は大学時代ある秘密の特訓をうけたお陰なのである。まるでスポーツ劇画みたいでぎょうぎょうしいが、大学で出会った一つの授業、『発想法』という授業が今日の私を作ってくれたと言っても過言ではないのだ。「この授業を行っている所は日本に三か所しかない。君達は選ばれた者達だ。これ

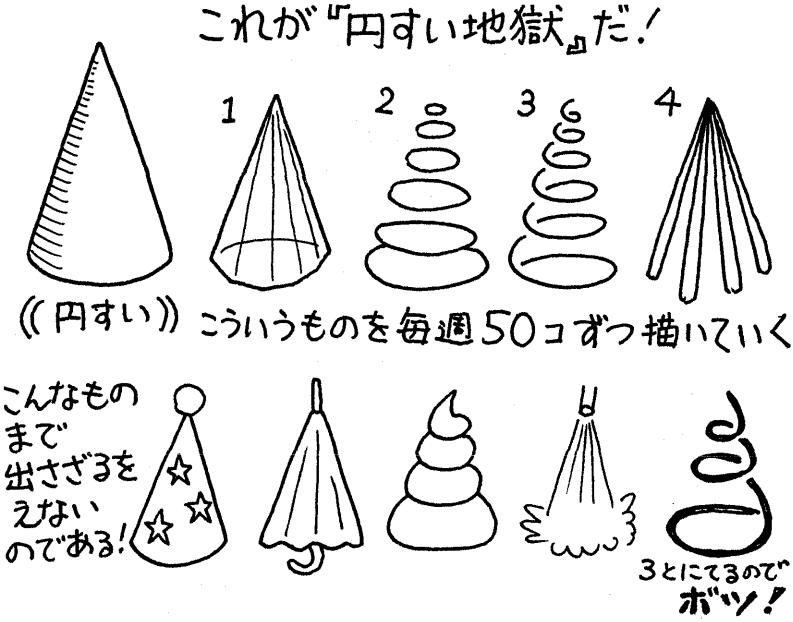
からのデザインは技術ではない。技術やテクニックを学びたければ他の美大へ行く方がはるかに上達する。君達はそういう技術者になるのではなく、そういう者達を統合し、組み合わせてすばらしい物を成せる者になってもらいたい。発想法とはそれを鍛える授業だ。」その授業の担当の高山正喜久先生の開口一番の言葉は私達のエリート意識をくすぐった。

が、その直後から、「無間地獄」の始まりだった。先生は私達が各自用意したケント紙を、縦五横一〇の合計五〇の枡目に区切らせた。そして言った。

「先ず自分の好きな立体を一つ選べ、決めたらそれを一番左上のマスに描け。」私達は言われるままに描いた。私は「円すい」を選んだ。先生は言った。

「さて、来週までに『見た時に今決めた立体を連想させる絵』を五〇通り描いて残りのマスをうめてこい。これは毎週五〇ずつ一年間続ける。多い分には構わない。ただし、イメージの似た物はチェックして除く。以上、では今日の授業はこれまで、サラバじゃ、ワハハハハハ……」ぼう然とする私達を残して先生はどこへともなく立ち去った。（多少の脚色あり）

図を見ていただく方がわかるが、正に「円すい地獄」の始まりである。毎週五〇通りはハードである。けれど人間やればできるもので、二五〇位は軽く誰もが出せる。だがその先のつらさ！　街を歩きまわり、見る物全てを円すいに結びつけようとする。似た物も多くなり、それらは無情にハネられる。五〇描いた内、三〇しかOKにならない時もある。



これだけならまだ良い。鬼コーチはこれ以上に毎回一筋縄ではいかない難題を次々課してくるのだった。

○飛行機がバナナに変身する過程を五コマで描いて来い。同様に二つの全く関係ない物を五コマで変身させてこい。

○三枚の正方形のボール紙を絶対はずれない様におしゃれにつないでこい。ただし接着剤は使ってはならない。

○立方体を何かの形に

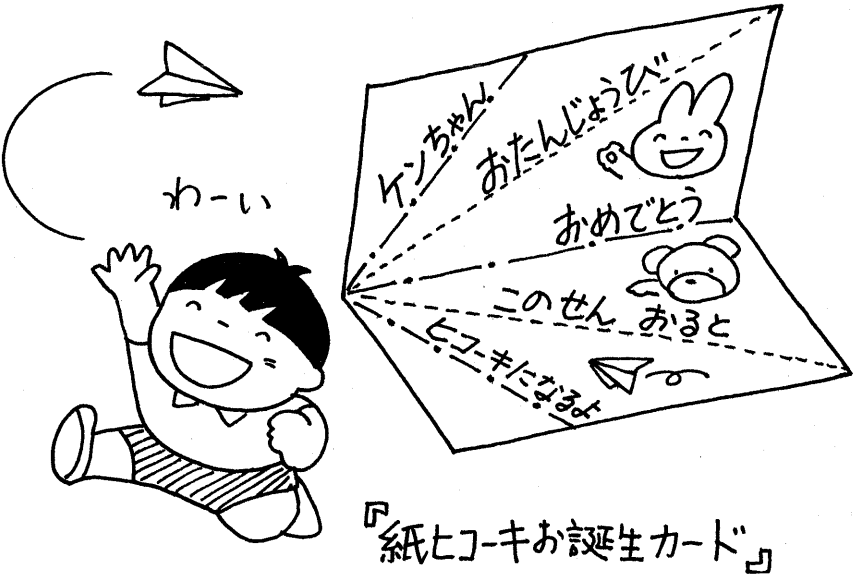
なるように切り開け。

○ハガキ一枚で、高さ四〇㎝以上、多少の風にはビクともしない塔を作ってこい……etc。

まるで一休さんとおしょうさんの知恵比べ、怪人二十面相の仕掛ける謎を解く明智探偵の如く、いかに先生を「うーむ」と言わせるか、大学生なのにまるで小学生の様にこの難解な宿題に追われる毎日が続いた。結局、枯れ葉散る秋、円すい地獄は八五〇でキブアップ！　他の課題も一つ二つを除いてはほめられる事も大してなかったが、知らぬ間にこの特訓は私の頭をグニャグニャに柔かくしていたのだった。

アイデアというものは、無い所から生み出すものではなく、世の中にある色々な事を上手につなげて作るものなのだ。つなぎ方がうまくいった物がいいアイデアと呼ばれるのである。そのヒントになる事柄はまるで夜空の星の如く無数に存在している。そこをのぞく窓を広く開ければそれだけ多くのヒントが見える。ヒントは多い程、つないでできるバリエーションは増え、当然いいものが生まれる率も高くなる。見る物全て円すいにならんかと探しまわっていたあの苦しみが、私にその窓をいつでも広々と開ける癖をつけてくれた。そして飛行機をバナナにしたり、のり無しで紙をつないだり数々の無理難題に苦しめられたお陰で、私はどんな無関係そうな事柄同士でも上手に組み合わせられない事はまず無いという自信をもってそれにチャレンジできる様になった。「頭を柔かくする事」とは「色んな事柄を広く材料として見る事ができ、それらを組み合わせるのに不可能を感じず

挑める気持ちを持つ事」であり、これは天性のものではなく訓練してできるものなのである。ケンちゃんにあげる誕生カードを考える時、今までにある誕生カードしか窓から見えてなければ新しい物など生まれない。そこでもっと窓を拡げ色々な物を見てみる。すると「ケンちゃんは飛行機が好き」「工作も好き」「外遊びも好き」と「喜ばす」ためのヒントがいくつも拾えてくる。そうなれば図の



『紙ヒコーキお誕生カード』

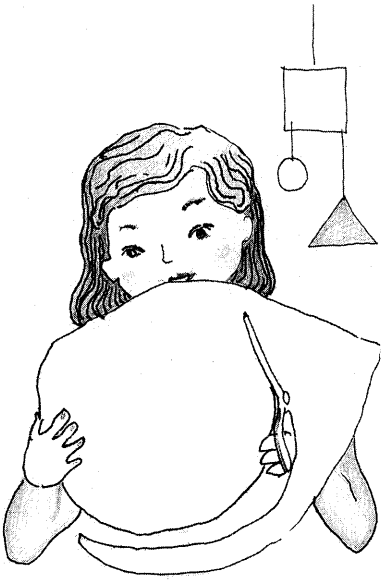
様な「紙ヒコーキ誕生カード」なんて物がスッと生まれてくる事があるわけだ。

この特訓に興味を持たれた方は手始めに丸い物をいくつ思いつけるか等やってみるといいかもしれない。リンゴ…太陽…アンパン…お金…街を歩いていて丸い物が気になってくる様になれば、あなたのヒントの窓が少しずつ開く癖がついてきた証拠である。

「偉そうに、人のフンドシで相撲をとるな！」

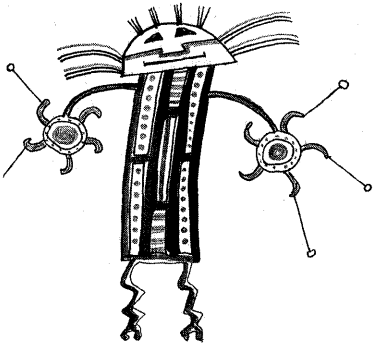
鬼コーチ高山先生に言われそうである。

（クリエーター）



「産」という営みの共有

中山まき子



＜ある鮮明な記憶＞

長時間トラックに揺られて三毛猫のオスがわが家にやってきた。当時猫の年は六～七歳、私が一〇歳位だったと思う。その猫、ミーは初めての土地が不安なのか到着した日から異常なまでに私にまとわりつき、夜は私の布団に潜り込んできた。一週間程後、私は夜中に目覚め、暗闇の中で戦慄した。左腕に感じた猫の毛の感触。加えて左足元にも猫の毛の感触があるのだ。白状すると咄嗟に「ミーをふんじゃった。どうしよう、のびちゃったんだ」と思った。慌てて電気を付けると、そこには最前の戦慄を越える光景が目に飛び込んできた。

オス猫のはずのミーが赤ちゃんを産んでいる。シーツは一面に濡れ、足元の毛の感触は、すでに産まれていた子猫のそれだった。ミーは目に涙を浮かべながら二番目の子猫

を、今まさに産まんとしており、しっぽの付け根辺りから子猫の体半分が見えていた。猫も涙を浮かべること、赤ん坊がどこから生まれるのかということを、私はこの時初めて見知った。ネトネトの子猫が産まれ、やがてグニャグニャの固まりが出てきた。ミーは自分のお尻をペロペロ舐めたかと思うと、その固まりを食べ始めた。それが何なのか当時の私は知るよしもない。ただ、ネトネト子猫の体の紐とつながっているその固まりを親猫が無心に食べ、紐の途中で食いちぎるさまを、まんじりともせず見ていた。親猫はそれから生まれたての子猫を引き寄せ、その身体中を舐め回し、近寄ってきたもう一匹をも抱え寄せた。

このできごとは当時の私の受容力を遥かに越えていたためか、「事実」だけが鮮やかに記憶され自分がどのような感情を抱いたのかについての記憶がない。ただ、翌日はウキウキと「ミーが赤ちゃんを産んだよ」とふれ回ったことを覚えている。

人間が生まれる場に遭遇したのは、それから二〇年も後だった。その時、心の片隅で哺乳動物の産まれ方の共通点を密かに再確認している、そんな自分のタフさに内心驚いた。

＜産に立ち会うこと＞

私たちは、現在の暮らしの中で生きもののリアルな生や死の過程にどれ程でくわすことができるだろう。産の体験者たちでさえ、初めての妊娠や出産の前に自分の身に起こる諸事について知る機会をどれ程持つことができただろうか。

戦後の日本社会では、人間が「生まれる」という営みは次々と病院の中に取りこまれ、医学的管理下に置かれるようになった。その結果、産は日常生活から隔離され、産のありようを伝えていく文化的基盤は断ち切られてきた。また「病人的地位」を与えられた産む女性たちは、安全性と引き換えに、産に対する主体性を放棄させられてきた。

こうした現象に対するある種のオールターナティブとして、七〇年代後半から、「ラマーズ法出産」に代表される、夫立ち会いの出産が巷間にもてはやされた。日本に伝えられたラマーズ法は仏人ラマーズ医師が考案した出産に対する考え方・方法、すなわち、

(1)産の前にその正しい知識と経緯を知るべく出産準備学習をすること

(2)産の経過に合わせた呼吸方法を習得し活用すること

(3)分娩準備訓練を指導し、分娩時に立ち会い介添をする人（モントリース）をおくこと

であり、これらにアメリカ文化の影響が加味され「(3)＝夫」という形となって輸入された。夫だけでなくわが子にもきょうだいが生まれ来る場を共有させようとする夫婦も現れた。

立ち会いという新しい産の方法に対して、「病院の分娩室は狭く立ち会いができる構造になっていない、衛生面での問題や心配がある、いきなり出産に立ち会わされた夫が気分を悪くしたり倒れたりして医療者に余計な負担をかける」、また「そもそも男や子どもが産に立ち会うなんてとんでもない」という感情論など、様々な反論も現れた。反論はわずか四〇年程の歴史しか持たない病院出産を「是」とする立場から、あるいは病院出産しか知らないが故に発せられているものがめだつ。

しかし、ラマーズ法に代表される産の変化や問い直しの動きは、女性たちに産む主体としての自覚を促し、産を共有する身近な他者を出現させた。また「生まれること」を日常世界に引き寄せ、この営みを語り継ぐ働きをした。

興味深いことに、実際に男性や子どもと共に産の場を共有してみると、私には、男性以上に子どもたちのほうが、産を見つめることに対してタフであるように思えてならない（もちろん事前事後に大人からの配慮がなされるに越したことはないが）。子どもたちは、私がそうであったように、事実をひたすら直視する。その時おそらく、生命の営みの厳然たる事実を見つめることを通し、理屈を越えた貴い何かを肌で知るに違いない。

〈次の世代へ〉

生や死が暮らしの中から切り離される過程で、私たちは「生まれること・生きること・死すること」に対する意味や価値を問う機会をも喪失してきたのではないだろうか。

「産」という営みを共有すること、それは極限を乗り越える赤裸々な他者と付き合うことであり、またその他者に寄り添うおのれ自身とも付き合うことを意味する。そうした体験を語り継ぐことは、次の世代に誕生や死といった多様な生の側面を思索する機縁をつくるだろう。そして、こうしたことごとを共有し語り継ぐ人が増えていくとき、私たちの日常は、もう少し温もりやいたわりが行き交う空間になるような気がしてならない。

（目白学園女子教育研究所）

附属幼稚園の教育(12)　最終回

卒業・進級の時期に当たって思うこと

村石　京

いよいよ三月、この年度の一年のしめくくりの時を迎えようとしています。

卒業、進級の時期を目前にして、残り少なくなった日々を指折り数えては、残りの日々を大切にしたい、子どもたちをいとおしみたいという思いが胸に一杯になります。殊に卒業の学年の級の担任は、一人ひとりのアルバムに写真をはったりしながら、二年前、あるいは三年前にはじめて出会ったあの当時の幼かった面影を思い出し、現在の姿とだぶらせながら大きく立派に成長したその歩みを自分のことのように嬉しく、誇らしく思って胸を熱くしたりする日々でもあります。そして一方では、あの時にはもっとああもすればよかった、あの子にはこうしてあげればよかったと

いう反省で、自分の至らなさを自責し、子どもへの申しわけなさに謝りたいような複雑な思いが胸の中に去来する日々でもあります。そして幼稚園生活最後の時期を、今まで以上に充分に楽しみ、心ゆく迄ゆったりと遊ばせてあげたいと思うのに、何故か日が経つのが早くて足元から鳥が飛び立つようにあわただしく卒業の日を迎えるような感じがするのは、一人私だけの思いなのでしょうか。

このような複雑な気持ちを持ちながら、卒業までの日々を惜しみつつ保育をしていますが、その中でも子どもとのかかわりをより一層深めたい、そしてお互いの中にお互いの出会いと、その出会いの中に刻まれたつながりを、より一層大切にしていきたいという思いを強くもっております。そして幼稚園生活の中の楽しかった日々の思い出とともに、人とのかかわりによって生まれ、育てられたよい人間関係もこれから先へつなげてほしいと願いながら、子どもとともに過ごす日々でもあります。

一方、どの学年においても、級としての集団の成長をふり返ってみると、あの四月のはじまった当初の個々ばらばらの状況を思い出して、現在級としてのまとまりや、子どもの中に芽生えている級の意識や誇りを嬉しく思ったりもいたします。また、更に大切なことは、個々の子どもの成長を見つめ、見直していくことにあることはいうまでもありません。一人ひとりの子どもについては、その子どものよく伸びた面を認めていくとともに、個々の子どもの持っている味わいある個性を大切にし、その子どもの独自なものを損なうことなく伸ばしていくことに、保育者として努力し、力をかすことが出来たかなどもふり返っていきたいと思います。

その中には勿論、まだ子どもによっては充分伸びていないところや、身についていないこともあるかもしれません。それは残り少ない日々の中にもあせらずに、着実に、保育者も子どももともに努力していきたいと思います。しかし大切なことは、級全体の中の一人として、この子はまだこの面が伸びていないとか、あるいは身についていない等と見るのではなくて、その子どもの中でよく伸びた面を認め、伸びなやんでいるところに手をそえていくようにありたいものです。平成二年度より、指導要録の記入方法も変わり、級全体の中における子どもを評価するのではなく、その子どものよく伸びた面を特徴として記入するようになりました。これは正に、保育者の子どもを見る眼がそのようにあることが大切なことなのだと思います。子どもの発達は一人ひとり違うわけですから、その子その子の個を大切にして、子どもの一年間、あるいは二年間、三年間の歩みを見つめ、その成長を認め、その努力を認めるようにしたいと思います。

そして今、幼稚園では、子どもたちは進級あるいは卒業という一つのエポックとなる時期に当たっているわけですが、人間としてのトータルなものとしてその成長を見るならば、そこに何か区切りや飛躍があるわけではなく、たゆまない歩みによって道すじがつくられていくことになるのです。そうした考えに立って、教師自身も子どもの成長をじっくりと見つめる気持ちを持ちたいものです。幼稚園卒業迄にはここまで出来なくてはとか、あるいは年長組になる迄にこの辺までやれるようにといった到達度を、教師の側で設定していくような捉え方はしないようにありたいと考えています。到達度を決めてしまうとどうしても、子どもを見る眼が、この子はまだそこ迄至っていな

いところがあるといった見方になりがちになります。そしてその子どもの持つ個性や良さに目がいかなくなり、全体の中の一人という見方になってしまいます。三月は幼稚園として一つの区切りの時期に当たっていますが、子どもの成長を見るときは、もっと長いスパンで捉えていくことが大切であると考えます。殊に附属学校のように、連絡進学の行われているところではそれも可能であり、子どもの今後の成長を追跡調査、研究したり、上級校の教師との話し合いの場を持つことなども必要であると考えています。そして卒業の時期を前にしては、以前の青く小さな芽であったものが、ふっくらと色づいて優しい蕾にふくらんできた現在を喜び、これからの人生の中で美しく大きく花開くときを迎える日を願って送り出したいと考えています。

とにかくこの時期に教師として見直していきたい大切なことは、子ども一人ひとりが充分満足した幼稚園生活を送ることが出来たかどうかということと、私ども教師は個々の子どもの多様なニーズに的確に、そして誠実に応えることを充分してきたかどうかをよくふり返り、その反省を自分自身のものとして次年度へつなげていきたいということです。また、子どもの心は一人ひとり異なっていますが、そのどの子どもとも、人とのかかわりの中で信頼のきずなをつくることが出来たかどうか、それは子どもと教師の間で、あるいは子ども同士の中で、よい人間関係として育て、培っていくことが出来たかどうかを充分見ていくようにしたいと思います。そして人としての優しさを、子どもの中に育てることに手をかすことが出来たか、教師自らも人に優しく接することが出来たか、あるいは子どもや母親とのかかわりの中で、相手の良さを知り、それを得て自分自身も成長す

ることが出来たかなどもふり返ってみたいと思います。そして更に残された日々の中では、人間関係の面で一層の強いきずなをつくることへの誠意をつくし、出来るだけの優しい心で子どもと接するようにしていきたいと思っています。

教師としては、卒業、進級の時期には、子どもの成長に対する喜びも大きいながら、一方では自分の手から巣立っていく子どもを前にして別れの淋しさを思い、また、充分なことの出来なかったことへの力量の不足をまざまざと自覚する複雑な気持ちの錯綜する時期であります。

子どもの人となりは夫々異なり、未来に向かって輝いていますが、やはり保育者の影響を受けることも大きくあります。年度の終わりに当たっては、子どもの成長の歩みをふり返るとともに、教師本人が、自分自身として本年度の反省を充分した上で次へのステップとし、教師としての研鑽と、人間としての向上をはかる努力をしていくことが大切なのではないでしょうか。いろいろ思うことはたくさんあるのに、なかなか言葉としては書きつくせないものがあります。「教えるとは希望を語ることであり、学ぶとは誠実を胸に刻むことである」『教育入門』堀尾輝久著（岩波新書）の中にある言葉をもって結びとさせていただきます。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ある日の育児日記から (15)

佐藤　和代

もうすぐ我が家も四人家族。となると、2Kの住まいでは狭すぎるので、引っ越しをしました。

安定期とはいえ妊婦ですから、当日はほとんど友人に頼りきり。なかでもありがたかったのは、小学一年生の、いとこのお姉ちゃんです。圭とお姉ちゃんは、第一便で（車で五分ほどの場所なので、ワゴン車で何往復かして運びました）新しい家へ。まだ何も運ばれていない広い部屋で、二人であきもせず遊んでいてくれました。

このとき圭が何度も言っていたのが、「ドシンドシンしていいのね？」という言葉でした。

以前の住まいはマンションの三階で、しかもマンション中で子どもは圭だけ。圭がとびはねると下の階から苦情がきてしまうので、「ドシンドシンはだめ」と言わざるをえませんでした。でも今度は大丈夫。一階ですし、隣も子どものいる家庭です。親子ともども、のびのびした気分になれました。

お姉ちゃんが帰ってからも、確認するかのように、意味もなくとびはねていた圭。今でもときどき「ドシンドシンいい？」ときます。許可を求めなくてもはねまわれるようになったときが、圭にとっての引っ越し完了、なのかもしれません。

幼児の笑いとその保育における意味(2)

二歳児の笑い

友定　啓子

一、おかしさと笑い

笑いに関する研究は、一八九九年にあの有名なベルグソンの「笑い―おかしみの意義についての試論」が発表されて以来、百年近くの歴史をもっている。その中でもっとも多く論ぜられてきたことは「おかしさ」の分析であった。「おかしさ」を構成する要素の分析が、さまざまな文学・芸術作品や、日常の人間行動の観察に基づいてなされてきたのである。

しかし、私は一歳児の観察をしていて、「おかしさ」に基づく笑いにはほとんど出会わなかった。笑いの現象

はたくさん見ているわけであるから、一歳児の場合は「おかしさ」は笑いの主原因ではないということになる。

ところが二歳児になって、子どもたちが人間関係において笑いを自由に使いだすようになるとともに、この「おかしさ」に基づく笑いも少数ながらみられるようになったのである。

〈記録1〉

G子がコップを落とした。それを拾おうとして、いすの下に手をのばすと、コップがころがっていくのが見え、「アハハハッ」とはじけるように笑う。（一九八六・一〇・二二）

〈記録1〉では、子どもの中に「コップは動かない」という概念があり、それに反して、コップがまるで生き物のように、ころころと動いていったことが意外だったのである。またこの子どもは三歳の時に、先生が外でころんだのを見て「ウフフフッ、先生が回ったー」と報告してきた。ここにも「先生はころばない」という概念図式が成立していることを見ることができる。

このように「おかしさ」がわかるためには一定の概念枠組すなわち「図式」が必要になってくるのである。そしてその図式をもとに目の前で起こっている事柄とのずれを瞬時に認識できなければならない。かなり知的な理解力が必要になってくる。一歳児に「おかしさ」に起因する笑いがほとんど見られないことはこれに関連していると思われる。一歳児は図式をそれほど持っていないし、どちらかといえば図式を獲得し作動させることの方が課題である。「わかること」「受け入れること」にともなう笑いのほうが主流である。ただし身体的な図式についてのずれはキャッチすることができる。

二歳児でもこの知的な概念図式のずれに対応する笑いはいまだ主流を占めてはいない。もう少し、自分との関わりのあるところでの「ずれ」に反応しているように見える。例えば次のようなものである。

〈記録2〉

先生が紙テープを一メートルほどに切って、子ども達のズボンにつけていく。しっぽのようである。二、三人の子がつけてもらっているのを見て、

B夫「なんだー？　なんだー？　なんだって？　なにあれ、だーっ。」とはじけるような調子で言う。

M夫「ハハハッ、ハハハッ」

B夫「おもしろいなー、しっぽ！」

二、三人の子がつけてもらおうとならんでいる。A夫が身を乗り出して「ぼくもー！」と言って加わる。つけてもらった女児は恥ずかしそうにニヤニヤ笑いながら立っている。

先生「M夫ー、おいでー」

M夫「やんー、ハハハッ。なんだあー、こいよおまえも。B夫くんもこいよー」と言いながら行く。

先生「B夫ー」

B夫、ニッと笑って「なに、なに、ちょっと、なんだよー！　なんだあれ、なんだあ？　なに、これ？」

と抵抗を示しながらも先生のところへ行く。つけてもらいながら、肩をすくめて「ウフッ、なんだこれ？　なんだ？」

先生「B子ちゃん」

B子「うわあ」

と驚いたような声を出す。B子、F夫もつけてもらい、自分の後ろを気にしながら、恥ずかしそうに歩く。B夫もてれくさそうにI夫と「なにこれ？　なにこれ？」と言っている。G夫は名前を呼ばれて、弾むようにして先生のところへ行く。

そうこうするうちに結局ほとんどの子どもがつけてもらい、てんでに動きだしている。B子はしっぽを引きずりながら走り回り「ねずみ」と言う。A夫は自分の後ろを見ようとするが見えないので、鏡のところへ言って伸びをして見ている。C子はいそいそとしっぽを引きずって走り回る。F子「ねこ」と言いながら動く。M夫「しっぽがはずれてるよ」と人に言う。女児三人がしっぽつきで楽しそうにかけまわる。B夫が観察者のところへやってきて「走るとしっぽがガタガタふるえるよ、見て」とニコニコニコッとうれしそうに言い、観察者に走って見せてくれる。しっぽの先端がひらひ

らとゆれる。観察者が「あー、ほんとね！」と言うと、にっこり笑う。

そういうみんなの様子を見ながらも、D子は「いや」といってつけない。真剣な表情で全く笑わない。H夫もつけない。床にうつぶせにしながら、指をしゃぶっている。

（一九八七・二・四）

「しっぽをつける」というのは、それによって動物に変身することになり、かなり複雑な感情を引き起こす。「おもしろそう、やってみたい」という気持ちになることもあれば、反対に「そんなことととんでもない」ということもあるし「何だかしらないけど、やってみるか」ということもあるだろう。つまり、自分が変化していくことに対する構えの違いなのだと思う。私は、B夫の何度も繰り返される「なんだあれ？」のくすぐったそうな声の中に、「おもしろそうだ」という気持ちと「いやだ」という気持ちの相反する二つの感情を感じて、このあと彼がどう行動するかを興味を持って見ていた。結局彼は抵抗感を示しつつもその変身を受け入れていったわけだが、これとよく似た反応をしたのが、M夫とB子である。この子たちはクラスの中でも、自分意識が見える子たちである。つまり、先生や周りの人からの働きかけに対して、自分としての気持ちを示す子たちである。その一方で余り抵抗を示さず、むしろ喜んでしっぽをつけてもらう子たちもいる。それと全く反対の反応がD子とH夫である。この二人はこの時期不安定であった。とても変身を受け入れるどころではなく、必死で拒否している。

二、とぼけること、ふざけること

自分を関わらせているということで、二歳児で目立ったことは「とぼける」「ふざける」という行動である。それには笑顔がたいてい付随している。

〈記録3〉

♪あなたのお名前は…♪という歌に合わせて、自分の名前

を答える歌遊びをする。F子は自分の番の時、目は上目、すぼめた口から舌を出して、とぼけた顔を作りやり過ごす。

（一九八六・五・七）

〈記録4〉

G夫、出席をとる時名前を呼ばれても、知らんぷりをして横を向く。E夫が、G夫を指差して「あそこにおるよ、ここにおる」という。G夫、ニーッと笑う。

（一九八六・六・一一）

〈記録5〉

ごちそうさまの時、先生に「F夫君、パチンは？（手を合わせること）」と言われるが、F夫は下をむいてニヤニヤ笑ってやらない。みんなの「ごちそうさまでした」のあいさつがすんだとき、自分もさっと手を合わせ、おじぎする。

（一九八六・七・二三）

〈記録3〉はF子の例であるが、D子も出席をとるとき、自分の番になると返事をしないで、かわりにこの顔をする。私たちはこれを「とぼけている」とか「ふざけている」というようにとっていたのだが、どうもそれで

は不十分のようである。どの子にもこういうときがあるようだ。期待される行動はわかっているけれども、それはしたくない、そうすることで自分が変質していくことを直感的に感じ取っているのではないだろうか。相手に期待される自分とそれをしたくない自分、そのずれを感じ取っているのだと思う。そのずれを引き受けていることが「とぼけ顔」や笑顔になってくるのだろう。この「とぼけ」は人を笑わせようとしているのではなく、自分に向けられた「とぼけ」である。

そしてこの「とぼけ顔」がだんだん消えていく。

〈記録6〉

F子、歌に合わせて名前を答え、先生にほめられたあと、いすに腰かけて両足を上げ、それを両手で支えて打ち合わせる。

（一九八六・六・二五）

〈記録7〉

F子、歌が始まり自分の番を待ち構えている。まさに自分の名前が呼ばれそうな時に、小さい組の子が自分のそばにやって来た。F子はその子を手で押しのける。一生懸命歌を聞いて、待ちかねたようにタイミングを合わせて「○○F子」と答える。先生に「あっ、すごいねー」とほめられて、下をむいて足を二、三度バタバタさせて、うれしそうにする。

（一九八六・七・二）

F子は、先生の歌に合わせて名前を答えることに決めたようだ。一生懸命歌に集中し、やっと答える。先生にほめられてうれしい、同時に恥ずかしい。そのように変化した自分をとらえているのだと思う。恥ずかしいとは他者に対して恥ずかしいのではなく、この場合自分に対して恥ずかしいのだと思う。〈記録7〉では、タイミング悪くそばにやって来た子をおしのける。その真剣さが非常に印象的であった。それほどに自分の名前を答えることに自分をかけていたのだと思う。

三、他者の目をとおした自己意識

前の記録もそうだが、この時期の笑いは子どもたちの自己意識に関連していることが多いように思う。それは二歳から三歳という時期が「自我」の形成期であることに関連しているようである。エリクソンは自我同一性（アンデンティティ）の形成過程を自分と社会の接点における自我の葛藤を克服する過程としてとらえた。私は、まさにこの「自分と社会との接点」をこの時期の子どもたちがとらえ始め、それを統合するという自我の機能が笑い（笑顔）という形に表れているのではないかと思う。

〈記録8〉

C夫、G夫とだき合って歩く。他の子どもにつまづいてころぶ。C夫は起き上がり、観察者に気づいてニコッとする。

（一九八六・一〇・二二）

〈記録9〉

F子、寝ている女児のほおをおそるおそるなでる。何回か繰り返した後に、それを見ていた観察者に気づきニコッと笑う。

（一九八六・五・七）

この二つの記録は全く同じ対人構造を持っている。前の記録は失敗を人に見られた。後のほうは失敗とは言えないがやはり見られている。自分の行為を人に見られたことに気づいた時に笑顔が出るのである。「人に見られる自分」とは社会的評価を受ける自分である。自分が感じる自分の他にもうひとつの自分があることに気づいている。その二者を統合する働きがこの笑顔である。

〈記録10〉

B子が遠くから「D子ー、きてもいいよー、こっちに」と叫ぶ。D子はそれに答えて、「オーイ」と返事をする。観察者がそれを聞いてニコッと笑うと、D子がそれに気づいて「バカッ」と怒ったように言う。

（一九八七・一・二一）

私が思わずニコッとしたのは、この子が他の子どもの

働きかけにこんなにやわらかく反応するのが珍しかったからだ。けれどD子はそんな自分を人に見られたくなかった。まだ自分の変化を自分で受け入れきれていなかったのだと思う。その不安定な自分を守らなければならず、それが「バカッ」という反撃の言葉になったのだろう。

〈記録11〉

G夫、私の前へトーッとかけだしてきて「キャーッ」と言いながら、畳のところへすべり込み、ころんで見せる。観察者をニコッと見ながら「すべっちゃったー」と言う。

（一九八六・一二・二五）

これは、ほとんど見られる自分を意識しての行為である。観察者が笑ってくれるのを期待しているのである。いろんなことができる自分、そしてそのことで周りにも受け入れられる自分、つまり自己と社会の統合を確かめているのであろう。

二歳児はさまざまな形で自分を認識し始めていく時期であることが笑いを手がかりにしても認められる。

（山口大学）

参考文献

1. E・H・エリクソン著、小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房、一九七三
2. E・H・エリクソン著、仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房、一九七七
3. 津守真『自我の芽ばえ』岩波書店、一九八四

祐子四歳
肉親との初めての別れ
～天国の祖母を忍んで～

小蘭江幸子

びわの好きな義母でした。毎年六月になると、きまって義母の知人より大粒のびわが届けられ、隣に住む私共長男一家も、おすそわけにあずかっておりました。

去年の春は、義母が植えたと思われる勝手口のびわの木が、初めて実をつけたというのに、義母はそれを味わってみることなく、永遠の眠りについてしまいました。五月二十日のことでした。

まだ青く固いびわの実の下で、四歳の長女祐子と私は、病院から帰宅した義母の亡骸を出迎えたのでした。

「おばあちゃん、お帰りなさい。」と声を出して迎え入れたものの、もはや二度と目をあけて、自分に語りかけてくれることはないのだということを、祖母の顔を見るなり、祐子は悟ったようすでした。

二日後の告別式で、棺の中の祖母を花で埋め、ふたを打ちつけた時、祐子は、私のスカートの端をしっかりと握りしめ、ポロポロと涙をこぼしておりました。

「おばあちゃんの体はね、死んでなくなってしまうの

だけど、本当のおばあちゃんは、これからも、いつも祐子と一緒にいて、祐子のことを守ってくださるのよ。だから、じきに淋しくなくなるのよ。」祐子を抱きしめてなぐさめながら、実は、自分の父親を失った時のことを思い出しておりました。私の弟は、焼場の煙突から出る煙をみて、「ビニール袋につめこんでとっときたいなあ。」とつぶやいておりましたが、私の方は父が息を引きとった時から、亡骸を清めながらも、そして骨をひろう時にも、これはもはや父親でもなんでもない、本当の父はいつも私の肩先にとまって私に語りかけてくれる父だけなのだから……と思ったものでした。

焼場で灰になった祖母の骨を見て、「このお骨のおばあちゃんが、これからは、私のことを守ってくれるの？」と、急に現実的なことを質問してくる祐子でした。

「お骨はしばらくしたらお墓におさめてしまうけれども、おばあちゃんは、いつも祐子の心の中に住んでいるのよ。」それから納骨まで、義母の遺骨は、昼は、空家になってしまった義母の家の仏間にすえ、夜は、私共長男一家の居間に連れてくるという具合に、二軒の家を往ったりきたりしておりましたので、祐子も私も、義母が生きていた時と同じように、朝夕、話しかけながらすごすことができました。

祐子は、時々思い出したように、祖母の残していってくれた「美しき天然」のオルゴールを回してはききいっておりました。「これを聞いているとおばあちゃんの顔をすぐ思い出せるの。めがねかけててね。」「おばあちゃんのお薬を数えて包んであげるのが私の仕事だったのに…。」「もう一度おばあちゃんに会いたいなあ。」と涙ぐむのでした。生前の義母は、どちらかといえば、私共夫婦よりもむしろ、祐子にとっては厳しい祖母だったのではないかと思います。義母から要求されるしつけ等についての内容が、祐子にはどのように受けとめられているのだろうかと不安になったこともありましたが、「おば

あちゃんに会いたい。」という祐子のことばの中には、何ものにもかえがたい祖母と孫娘との心のつながりを感じさせられ、私も救われたような気持ちになります。祖母から寄せられる厳しくも暖かい愛情を、祐子はしっかりと受けとめていたのでしょう。

勝手口のびわの実の収穫は、義母の納骨の直前でした。百個にみたない実りでしたが、毎日のように収穫を指折り数えて待っていた祐子にとっては、最高の「おばあちゃんからのプレゼント」でした。「天国のおばあちゃんから、宅配便で送ってきたびわよ」と祐子は、父親や親戚に告げ回っていました。

実は、このびわの木は、祐子が生まれた年に、庭を整備してくれた植木屋さんが、果実をつける木は、「成り下がる」に通じて縁起が悪いので、切ってしまうように、と言ってくれた木なのです。その時、義母は、「そのうち、実をつけると思うから放っときましょう。」と、おそらく幼い祐子達のために、切らずに残しておいてくれたのだと思います。その義母が、去年の秋には、癌の末期となっていました。そのことを、家族達は、義母に知らせずにきました。びわが実をつけたことに私が気がついた時には、義母の病状は相当に悪化しはじめていましたので、びわのことを義母の耳に入れるチャンスは最後までめぐってきませんでした。なにしろ、一度、縁起が悪いといわれたびわでしたから。むしろ義母の目にふれないようにと念じたい思いでした。切ってしまうべきだったかとも思いますが、それは義母の家の義母の木ですし、話題にのぼって病気に障るようなことは、できませんでした。かくして、このびわの木は、びわを愛した義母から、びわの好きな祐子への天国からのプレゼントということになったのでした。

さて、この八月、祐子は、いつも忙しい父親が、折角、骨折って連れまわしてくれたスケジュールが負担すぎたのか、夏季熱をこじらせて、三十九度の熱が一週間ほども続き、ほとんど食事がとれないような状態でし

た。そんな折り、亡くなった義母の親友が訪れて下さり、「毎年、届けてあげる慣例だったから、お仏壇に供えてください。」と、信州のとうもろこしと、五平餅を届けてくださったのです。この五平餅がまた、我家の子ども達の好物で、頂き物をした時には、義母はいつも私共のところにも分けてくれていたものでした。祐子は五平餅をみると、「きっと天国のおばあちゃんが、祐子に食べさせてってNさんに頼んでくれたと思う。」と喜び、御飯がわりに、二食、五平餅を食べ、食欲を回復させていったのでした。食の進まない祐子に、「そんなことでは、天国のおばあちゃんが、祐子をお迎えに来てしまうのよ、それはまだ困るでしょう。」と叱っていた私の声が、天国の義母の耳に届いてしまったのかもしれません。天国と地上に別れてしまってもやはり、「姑、嫁」……と、義母は苦笑しながら援助の手をさしのべてくれたのかもしれません。

さて、この九月には、祐子、章博に続いて三人目の新しい命が、私共一家の一員に加わる予定です。義母の闘病中に私が懐妊してしまったために、充分な孝行ができなかったと思うのですが、この調子では、きっとあれこれ、天国からの援助が届くような気がします。

こんなふうにして、義母は、祐子達孫や、嫁の私に、肉親の暖かいイメージを残していってくれたのでした。お義母さん、長い間、ありがとうございました。どうぞゆっくり眠ってください。

（はるにれの会）

あわただしく毎日を過ごしているうちに、もう三月号になってしまいました。今月の特集は〈生まれる〉。この存在感ある大きなテーマについて、皆様もご一緒にお考えになってはいかがでしょうか。ご自分が生まれたこと、人間関係が生まれる、木々の芽生え、子ども達の作品ができる、幼稚園のうさぎが生まれた、宇宙はどうやってできたのか……。

村石京先生の「附属幼稚園の教育」は今月で最終回です。保育のその時々において、今何が大切なのか、という〝心〟の準備を、月を追って書いていただきました。一年間、どうもありがとうございました。

加用文男先生の「素朴さとパワーと」お話の一つ一つに〝うんうん〟とうなずきながら思わず笑ってしまったのは、私一人ではないでしょう。加用先生は、教育学者であると同時に、家庭では、子育て真最中のお父さんでもあります。私達の身近にある、見逃してしまいそうな、大人と子どもの素朴なつきあいを、暖かい目でとらえ、誠実に、大人も子どもも対等に、そしてユーモアでつつんで書いて下さいました。

＊

娘がこの三月、小学校を卒業します。小さい時は、喘息で体が弱く、甘えっ子で、何でもお母さん第一の子だったのに、少しずつ家庭のわくを離れ、自分の考えで判断していくようになりました。特にこの一年の成長は、目を見はります。親とは別に、信頼できる友達関係ができ、友達同士、お互いに、今まで自分達が知らなかった環境のたくさんの刺激をうけ合い、視野も広がってきているようです。こうやって、親から少しずつ、離れていくのでしょう。いえ、中学生になったら、一気に大人びてくるのでしょうか。子どもらしさも、あと二～三年。この微妙な時期、行きつもどりつ、楽しみながらの子育てでありたいと思っています。

（K）

幼児の教育　第九十一巻　第三号
（一九九一年三月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

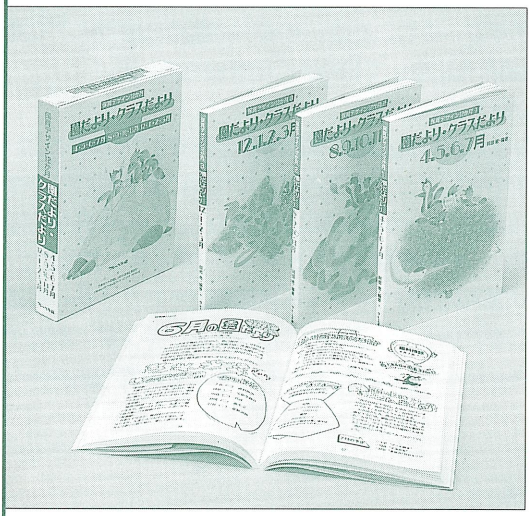
平成四年三月一日　発行
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
東京都千代田区神田小川町三―一
振替口座　東京九―一九六四〇
電話　〇三―三二九二―七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育デザイン12か月

園だより・クラスだより

4・5・6・7月	8・9・10・11月	12・1・2・3月



阿部　恵・編著

- 子どもの生活場面にぴったりのカットがたくさん。
- 12か月分の保育園だより幼稚園だよりの実例・0歳から5歳のそれぞれのクラスのおたよりの実例（文案とカット・レイアウト）。
- いろいろな大きさの飾りかこみやみだし文字。
- 行事の案内状や目をひく掲示板づくりのためのアイデア。
- 1巻資料…よくつかう文字50音や暑中見舞ハガキの図案。
- 2巻資料…ミニ連絡用紙やおたよりによく使う定番かこみの図案。
- 3巻資料…十二支や年賀状の図案や、子どもの一日の生活場面のカットなど……。
  いろいろな保育場面で役立つ資料も掲載しています。
- この3冊セットをお手許において、読みやすく心あたたまるおたよりをつくり、豊かな園生活に役立ててください。

B5変型判・各巻120頁・各定価1,700円（税込）

セットケース入・セット定価5,100円（税込）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

——子どもと人間の友あての女性たちの書簡——

旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、バート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。
本書はその完訳本です。
書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱をうけたH・ケーニッヒ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。「さあ、私たちの子どもたちに生きよう！」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルテンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルテンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。

●推薦します。

広島大学名誉教授／日本ペスタロッチー・フレーベル学会会長
荘司雅子

全国国公立幼稚園長会会長
江橋照雄

日本保育学会会長
岡田正章

全日本私立幼稚園連合会会長
小林龍雄

全国保育協議会会長
水岡　薫

特　色

- 幼稚園草創期のフレーベル先生の教え子たちの手紙を年代順に紹介し、その揺籃期に生きた人々の苦難と歓喜にいろどられた歴史的証言を集成しました。
- 師・フレーベルに寄せられた教え子たちの数々の手紙は、幼児教育の父フレーベル先生の魅力ある人間像と教育思想のエスプリを余すところなく浮き彫りにします。
- “キンダーガルテン”運動に身を挺した女性たちの英知と情熱にあふれる生き方、考え方は示唆に富み、幼児教育・保育に携わる人々の使命感を喚起します。
- 幼稚園の園長や保育者の立場からの保育内容や方法に関する相談や報告が多く、保育現場の得難い保育実践上の参考資料です。
- 女性たちがいち早く獲得した職業的地位である幼稚園教員、保育者たちの苦難の歩みが生々しく表白されており、女性職業史、婦人解放運動史の貴重な資料です。

岩崎　次男　他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉

定価4,000円（税込）

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館